

ナマイキ女スパイ

強制連続絶頂

ストーリー付き

CG

総ページ数74ページ





CHARACTER

【chloe】

クロエ

ブラシA発動

男たちを魅了してやまない女スパイが、
夜に紛れるために用意した衣装へお着替え。
果たして、潜入任務は無事に成功するのだろうか。

B92
W58
H90



「あちゃー……。
「これはちょっとしくじったな……」

スパイとして潜入した敵の海賊船の中、
勢い余って足を踏み入れた宴会場で、
クロエは捕まり拘束されていた。



「まあ、女一人を必死で拘束するような
臆病者にいくら囲まれたところで、
どうってことないけどね」

クロエは船員たちを挑発し隙を作ろうとするも、
相手はそれを笑って受け流し、
クロエの身体にそれぞれ手を伸ばした。





「んっ……なるほどね、ごういうことが
したかったんだ。まあ、仕方ないか。
あなたたち、モテなそうだし」

うわ

うわ

うわ

うわ

うわ

うわ

うわ

「動けない女の子相手じゃないと、エッチなことなんてできないもんね……っ」

服の上から身体を触られながらも、クロエはなおも船員たちを挑発した。

しかし、それに対して船員たちは手を引っ込めた。そして、リーダーらしき船員がピンク色の淫具を取り出した。





船員たちは手際よくクロエの服をはだけさせ、
露わになった桃色の乳首と陰核の辺りに
淫具を装着させた。



「んひ、んんう……クリ、しびれて……っ、
でも、こんな程度の刺激だったら
全然我慢できる……んんっ、ぐう、んんうっ」

ア

クリ

クリ

ローターの刺激に耐えるクロエに、
船員はまだ序の口だと笑った。
同時に、淫具による刺激が強くなった。

クリ



「あつ……あああつ！ 震え、強く……ううつ！
いきなり……んうっ、ひやあんっ、ふああつ！」

ア

胸と陰部への刺激から逃げることもできず、
拘束された身体を震わせるクローエを見て、
船員たちは好き勝手な言葉を投げかける。

しかし、その中に自分を雇った団長を
馬鹿にする言葉があったことを聞いて、
クローエは表情を引き締めた。





「そ、そうだ……っ、私は、こんなことで
負けるわけには……んっ、んう、んんう……」

うわっ

あ

え

うわっ

うわっ

うわっ

「お、オモチャを使つてもこの程度なんて、
やっぱり……あなたたちは情けない……っつ」

ア

ア

ア

ア

ア

ア

必死で虚勢を張るクロエに対し、
船員のひとりが巨大な淫具を持ってきた。
まだ物足りないみたいだなとニヤニヤしながら。





「ん……っ、や、やだ、それおっきい……っ！
そんなの、私の中に入れないで……！！」

ア

あ

あ

あ

ア

夕回エの訴えなど誰も聞くはずがなく
淫具は肉壺へと挿入されてしまった。

















「中……ぜんぶ……ぶるぶる……」
「あ……ん……あ……あ……う……」

「あ……」

激しい振動に膣全体を刺激され、
クローエは鳴き声のような喘ぎを絞り出す。

それを目の当たりにした船員たちは、
彼女のことをいやしいメスと罵り始めた。





「ちゅちゅ……あぁっ、んんっ！
ちがう……ちがうの……
気持ちいいの、とまんない……っ！」

「アッ」

船員たちの薄汚い野次にも、クロエはすでに
反論できるほどまともな声を発せていなかった。





「イク……もう、イク、イっちゃう……っ。
スパイなのに、オモチャでいじめられてえ……
おまんこ堕ちちゃううう……っ」

「おまんこ」

「おまんこ」

「っいぞ、敗北を口にしたクロエ。
男のひとりがダメ押しとばかりに淫具を
いじくると、腰が浮きあがり始めた。」

「おまんこ」







「んぐっ、あ、ああ、んお、ふあ、ああっ!
らめえ、らめええ……出ちやう……そんなに
されたら、えっちおつち出ちやう……っ!」

アッ!





絶頂し、身体を
させるク回エ。
それと同時に秘部からは潮が噴出し、
薄く色づいた尿が放物線を描いた。

「あああ」

「……」





「えっちなおっや、うっはに生かされた……
ぶいっやうて、うっは……」

おっや……

ゴッ

ぴん

ぽん

「ああ、いやだあ……おしっこまで出てる……
おしっこ出てるところなんぞ、
誰にも見せたくないのに……」
ひいひいひい……」

潮と尿を垂れ流すことに羞恥しつつも、
脱力したクロエは指の一本すら動かせない。
股間の周囲をいんわいに濡らす……
雌に成り下がっている。

ゴッ

ん

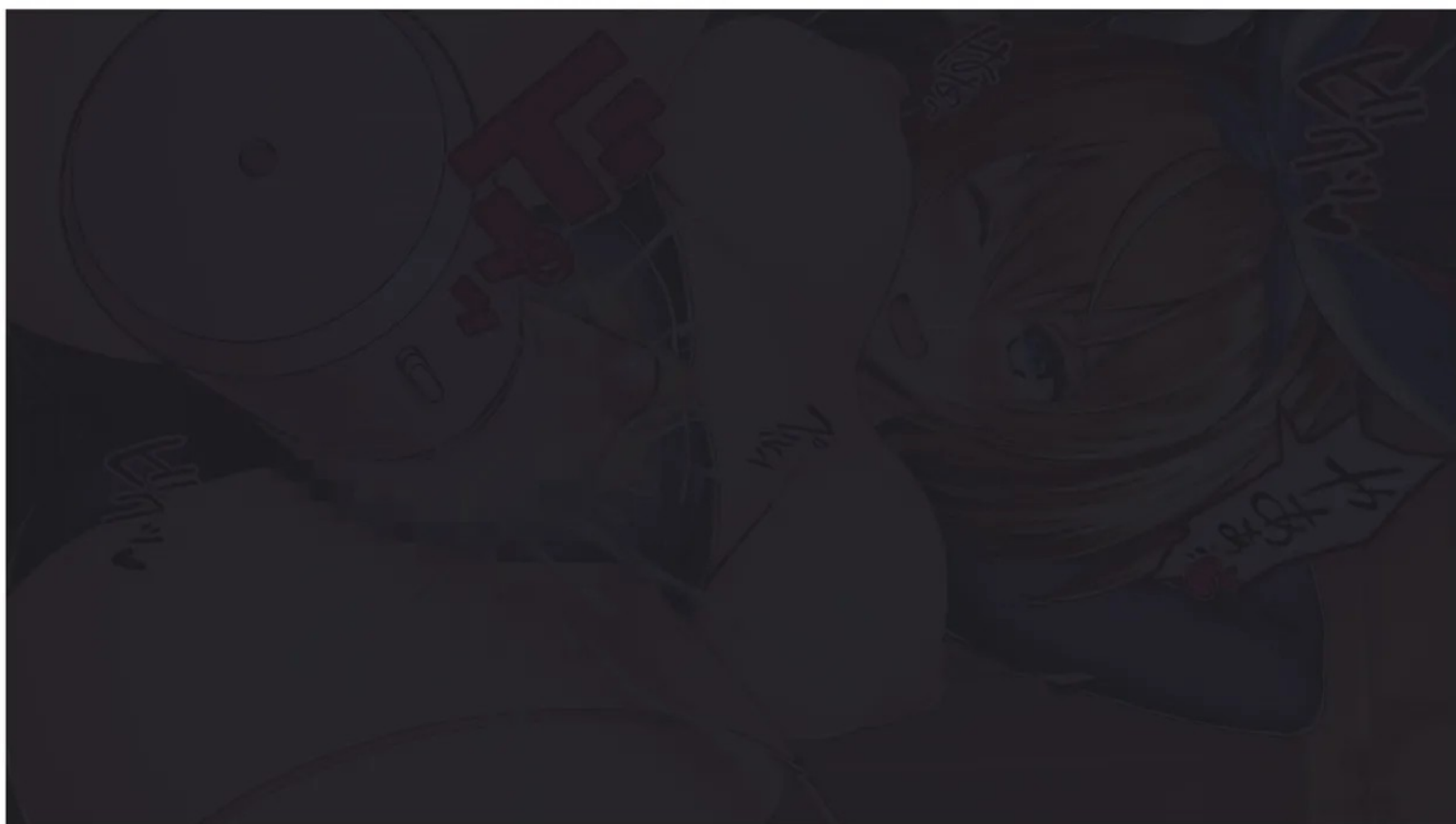


「あ……はあ……あはは……見られちゃだめな
と……全部見られちゃったあ……」

「……」

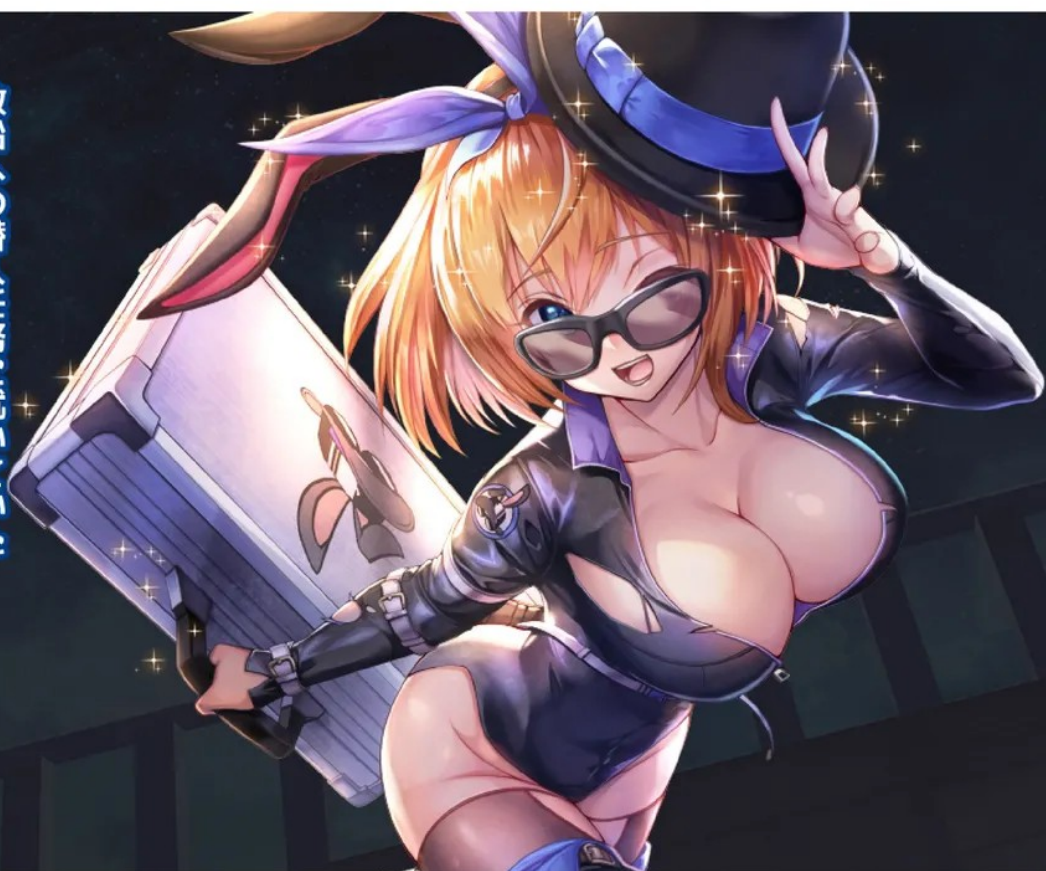
惨めに果てたクロエを下品にはやし立てる
船員たちの中で、
クロエは心も身体も反抗する力を失い
ただだらしない笑みを浮かべた。





「……というわけで、なんとか逃げ帰って
来たって感じなんだけど……」

敵船への潜入任務に就いていた
クロエからの報告によると、
彼女は拘束されて酷い目に遭わされたあと
隙を突いて逃げ帰ってきたという。



「それで、急いで逃げてきたから……
その、特に成果はないっていうか……」



なんの成果もないこと自体は仕方ない。
帰還できただけでもマシだっただろう。

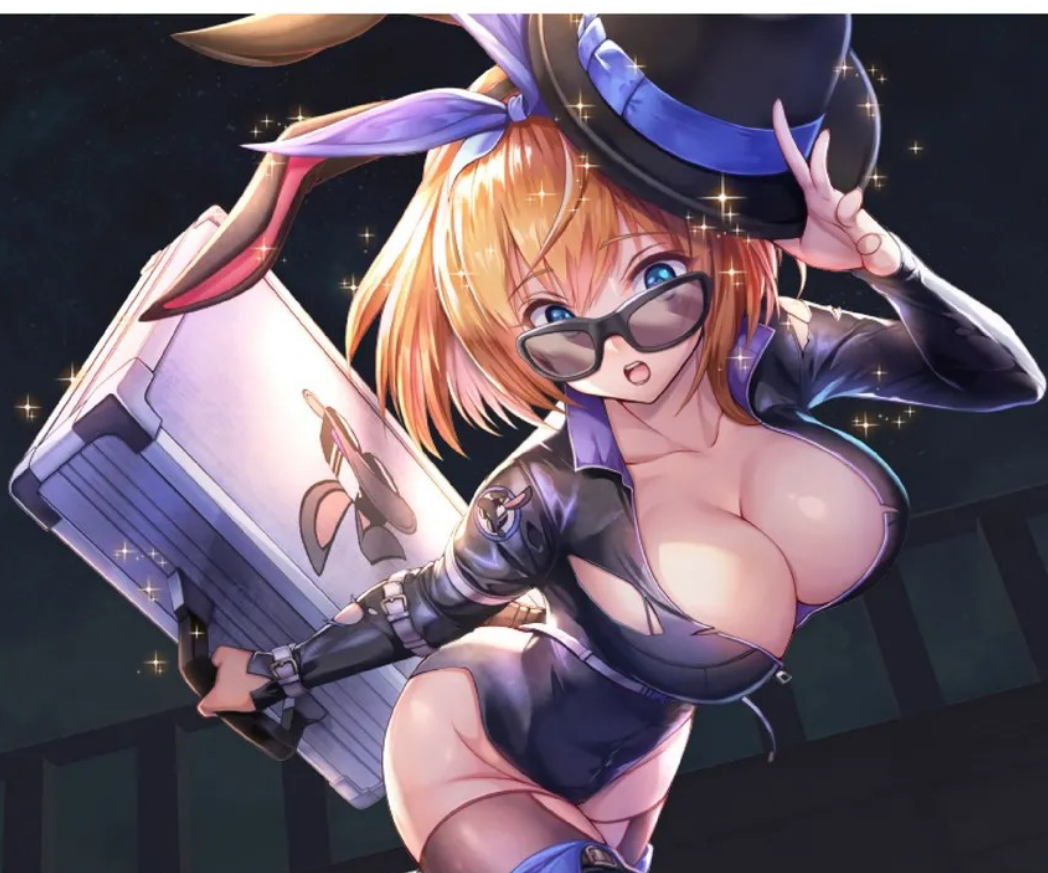
「うう……でも、帰ってくるだけじゃ……
旅行に行ったわけじゃないんだし……」

無論、その点に関しては看過できない。



特に、拘束されて酷い目に遭ったという点だ。
これは特別な訓練が必要だ。
二度と同じことにならないように。

「特訓って、いつたいにを……？
なんか、嫌な予感しかないんだけど……」



不安がるクロエの両手に拘束具をはめ、
抵抗できないよう身体の自由を奪った。

「えっと、これで特訓ってことは……拘束された状態から逃げ出せってこと？」

すぐに否定し、特訓の詳細を告げた。



「……えっ、そのまま感じないように耐えろって？
確かに、そういう目には遭ったけど……」



「でも、それを」でやる必要なんて……
私はそもそもえっちなことは苦手じゃないし、
あれは油断したせいでああなっただけで……」

特訓は、もう決まったことだ。
クロエの言うことには耳を貸さず、
フロントのファスナーに手をのばす。

ファスナーを下げると、豊満な乳房が
ぶるんと零れ出た。早速、背後から
緊張気味の身体を触っていく。

ドキ.

ドキ.

はぁ

はぁ





「んっ、待って……
後ろから弄られるの恥ずかしい……」

恥ずかしいと言われてもとまらない。
乳首に指を添えながら、
柔らかな胸の形を変えるように揉みしだく。

ドクン

あ

はあ

フム

ん



「こ、こないやらしく触られても
感じちゃダメなんて……はう、ん、んう……」

抵抗する意欲が弱いのか、
ク回工は愛撫を受け入れ始めている。
これでは特訓の意味が薄れてしまう。

あえて罵ってやろう。
この程度で感じてはスパイ失格だと。

ドン

ヒクッ

あ

フム

はあ

ん



「そんな、スパイ失格……って……んっ。
べ、別に……このくらいなら、全然動けるし、
感じてるうちに入らないよ……っ」

こちらの言葉に反抗心が湧いたのか、
クロエは虚勢を張るも、その声に喘ぎが混じる
のは抑えられていなかった。

そこで、その虚勢も剥がしてやるため、
ぷりんとしたお尻にペニスを押し当てる。

ドン

あ

はあ

ふん

ひん

ん





「ん……っ、あ、当たってるぅっ……
団長のおっきいの……
このまま、入れる気……？」

ドン

ヒリッ♡

あ

フム

はあ

ん

「わ、私は、入れられても余裕だけど……
いつ入れてくれてもいいくらいで……っ」

なおも虚勢を張ろうとするクロエ。
その二番奥まで、一気にペニスを挿入した。

ドン

あ

はあ

アッ

ん



「ぐっぐっ、ふ太いの、一気にいいっ……」
「ふっ……っ、んっ、はぁぁぁ……っ」

やはり感じているのではないかと指摘する。



「い、今は……っ、驚いただけだからっ、
急に……っ、奥まで入れられて……っっ」

膣内を貫かれ大きく身体を
のけ反らせたクロエは、
荒い息を吐きながら言いわけを絞り出す。

そして息を整える暇を与えないように
ピストンを始める。

はぁぁっ

はっ

ぬっ





「ん、ああ、ふあ、ああっ、く、んっ……..
動くなら、動くって……ひゃん、あ、ひあっ！」

パッ
パッ
パッ

パッ
パッ
パッ

ビッ

フッ

はああ

は

え

「これ、本当は団長がしたいだけじゃ……
んぐ、あ、んんっ、はんっ、あ、ああっ！」

こちらに話の矛先を逸らそうとするクロエに、
相手がどんな状態でもスパイなら耐えないと
いけないことに変わりはないと告げる。

パッ
パッ
パッ

ヒッ

フッ

はああ

は

ん



「そ、それは……っ、そうだけとっ……
団長が楽しんでるようにしか思えなくて……っ……
わざと色んな角度で突いてくるじ……」

弱点を探るように腰の動きを変えていると、
入口の辺りをカリが擦ったところでクロエの
腰がなまめかしく跳ねた。

ビクッ

フム

はぁぁ

は

ぬ







「んっ、弱点……？
な、なにを言っ……？
いまのは、
ちよっとくすぐったかっただけ……っ！」

クロエはなんとか弱点を隠そうとするも、
甲高い声と溢れる愛液を見ればそこが弱点
なのは二目瞭然だった。

パッ
パッ
パッ

ビクッ

フニ

はぁぁ

は

ぬ



「ぬ、濡れてるのは……っ、
あなたのおつゆでっ、
声は……うっ、反射で、
出てるだけえ……っ！」

弱点を重点的に責められ、身体をいやらしく
反応させながらも、クローエは意外なほど強情に
感じていないと言い張り続ける。



はぁぁぁ

は

ぬ

ビク

パッパッ

パッパッ

フニ

「ひゃ……っ、ううんっ！ 激し……っ、
硬いのジュポジュポって……っ、
んあ、あ、あんっ、ふああんっ……っ」

これでも感じていないと言い張るのか。
強く腰を打ちつけながら聞いてやる。

パッ
パッ
パッ

ヒッ

フッ

はあぁ

は

ん



「違う……っ、違うのお……っ、これは、
これはあ……っ、ああんっ、あ、ああっ！」

頑なに認めようとしないうろエに、
認めたほうが気持ちよくなれると
甘くさやいた。

パッ
パッ
パッ

ビクッ

フム

はああ

は

ぬ



「み、認めたほうが、気持ちいい……」

スパイがこの程度で揺れていいのと思うが、
続けざまに……やぐ。
クローエと気持ちよくなりたいと。

ビクッ

フム

はぁぁ

は

や







「拘束されて……っ、好き勝手ぱんぱんされるの、
いいっ……おまんこ、
すごく気持ちいいのぉ……っ！」

一度タガが外れると、
もはやクロエを縛るものは
なくなつたのか、快感を隠さないばかりか
こちらが言えと言つたことを
素直に口に始めた。

はぁぁっ

はっ

んっ



「ああ……っ、そこ、そこ……っ……、
さっき気持ちよかったところ……っ……
そこ突かれたら、イっちゃう……っ……」

最早、おねだりにすら聞こえる喘ぎ声。
お尻は絶頂を求めていやらしく動き、
媚態を隠そうという気は一切感じない。

「こちらも絶頂は近い。
なら、クロエが求めるままに
腰を振ってやろう。ただ激しく、ただ乱暴に、
愛液に満ちたいんわいな肉壺を責め立てていく。」

はぁぁぁ

は

ぬっ







「イク、イクっ！ おまんこイクうっ！
あんあんあんうっ
……ん、あ、あ、あぁっ！」

はぁぁ

は

ん

ビクッ

パッ
パッ
パッ

パッ
パッ
パッ

フム

「あ……で、それ……っ、ダメっ、イクっ！
イクイクイクイクっ
……んああああああんっ！」

一際激しい声をあげながら腰を振り膣内を
強く締め付けるクロエの二番奥へ、
ペニスを押し付けて勢いよく射精した。

ドッ

ペキ

はぁ

ビバ

やああ



「あっ……ふぁ……んうっ、んんうっ……
きもち、よかったあ
……はぁはぁはぁはぁ……」

行為が終わった後も、クロエは絶頂の余韻に
だらしない身体力を抜き、快感を隠すことなど
完全に忘れ去っていた。

そんなクロエへと、絶頂までしてしまつようでは
まだまだ特訓が必要だと告げ、ペニスを再び
膣へと押し付ける。





「え……まだ、特訓……？
ぞ、そう言えは……やつ、待って……っ。
まだ身体が……あああっ！」

やああ……♡

はぁ

ビーン♡

ドッ

ドッ



クロエの理由など知ったことではない。
なぜなら、これは雇い主が課す特訓なのだから。
朝まで、何度でも付き合わせてやろう。



